

巻頭言 「クリスチャンの想像力」

宇野 元

信仰に反感を示す本がさかんに書かれる現代の傾向は、将来、社会学的考察が関心をもつテーマになるだろう。それらの本は、キリスト教の信仰を、事実についての根拠薄弱な思い込みとして取り扱う。

ローワン・ウィリアムズ

アメリカの新聞「ワシントン・ポスト」は、政治に関する発言力で知られていますが、書評にも味があります。面白い記事を読みました。「小説における最も忘れがたい終わりの言葉」というものです。読者の心に残る結びという切り口から、英米の作品23冊を取り上げています。『クリスマス・キャロル』『華麗なるギャツビー』『日はまた昇る』『怒りの葡萄』『1984年』『ライ麦畑でつかまえて』などの古典的作品の中に『ギレアド』が含まれています。

祈るよ。それから眠るとしよう。

次のようなくだりを興味深く思いました。「アメリカ文学には、ひとつ、大きな欠陥があるだろう。人生のその他のあらゆる側面については大胆率直だが、信仰に真正面に関わることを神経質に避けることがそれだ。『ギレアド』はちがう。この作品は、21世紀の最も優れた小説のひとつに数えられるだけでなく、最も神学的な小説のひとつである。」

信仰に関わることを神経質に避ける傾向が、現代の特色になっています。けれども私たち人間の想像力は「事実」の上に立つときにこそ、大きく羽ばたくことができます。「神学は、神によって前提が作られ、特色づけられた学である」(カール・バルト)。小説『ギレアド』は、クリスチャンの想像力が神学によって実り豊かにされることを実証しているでしょう。そして、神学の源泉である神の言葉の無限の豊かさを。

平田真理さんが「M・ロビンソン『ギレアド』とカルヴァン」(『キリスト教文藝』2020年)のなかで、こう記しています。「マリリン・ロビンソンは、カルヴァンの著作に立ち返り、神の創造の業における『わたしは在る』に魅入られ、そこで見えることをひたすらに書いてきた作家であると言えよう。」神の言葉は、作家のみならず、私たちの想像力に力をあたえ、心をのびやかにひろげさせてくれます。